

第3回 防災研修プログラムの改定に関する検討会 議事要旨

- ・ 日時：令和3年3月16日（火）10:00～12:00
- ・ 場所：オンライン開催
- ・ 出席者：

座長	鈴木 秀洋	日本大学危機管理学部危機管理学科 准教授
同	高橋 聖子	江戸川みんなの防災プロジェクト プロジェクトマネージャー
同	長沢 涼子	福島県男女共生センター企画調査課 主任主査
同	野々口敦子	男女共同参画と災害・復興ネットワーク 運営委員
同	紅谷 昇平	兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 准教授

- ・ 議事

- （１）「防災研修プログラム」の研修試行及びフィードバック調査の結果報告
- （２）「防災研修プログラム」最終案の検討について
- （３）事例集（素案）について

議事（１）「防災研修プログラム」の研修試行及びフィードバック調査の結果報告 について

○セッション3では、講師が参加者に対してワーク1から4までの作業手順について説明し、参加者がそれぞれ取り組むという、一方向のスタイルで行われていたが、今後もこのスタイルで行われていくのか。ワーク毎に、参加者に発表してもらい、参加者間でワークの内容を共有することで、他の参加者のワーク内容を参考にできることなどの効果があることから、双方向のスタイルにした方が良いのではないかと思う。

議事（２）「防災研修プログラム」最終案の検討について

○セッション1は、とても分かりやすく、たいへん良くなったと思う。「男女共同参画」と「災害時の女性への配慮」の概念（全体像）が理解できるよう、平常時の男女共同参画の問題が、災害時の女性特有の問題への配慮の不足などにつながっていることを説明するスライドを1枚追加してはどうか。

○セッション1の飲酒量の増加は男性の問題で、それが孤独死につながると防災の分野では言われている。女性への配慮を重視して男女共同参画を説明するのであれば、このスライドは外したほうが首尾一貫して分かりやすいかもしれない。

○セッション1のスライド18で、「女性が参画する」「男女共同参画部局と連携する」

「女性リーダーの育成、男性の理解促進」という三本柱は分かりやすい。ただ、「女性リーダーの育成」は、「女性の参画」に近いのではないか。また、男性の理解促進は大事だが、女性側の意識も変えていくべきという見方もあるので、男性に限定しなくても良いかもしれない。

- セッション1後半のスライド「災害時には平常時における社会の課題が顕在化」において、平常時のジェンダー格差により、災害時に女性により大きな影響を与えるということを説明していて良い。しかし、ここであげているジェンダー格差の範囲・内容はやや限定的で、また最初の方で示しているデータと、ここであげている「平常時における社会の課題」の関連性が示せていないため、前半と後半のつながりが分かりにくい。そのため、セッションの前半で示すデータは、平常時にどのようなジェンダー格差があって、それが災害・復興時にどのような結果につながったかということを説明できるデータにしたほうが良い。
- セッション1「災害時には平常時における社会の課題が顕在化」のスライドについて、左右を逆にし、左に平常時の社会の課題、右に災害時の課題を書いたほうが良いのではないか。
- セッション1にあるようにデータを示した説明は、かなり興味をもってもらえるので効果的である。他の委員の意見にあったように、平時の格差の影響が災害への影響につながっていく話はとても重要だと思う。一方で、単に男女によって影響が違ふといったデータを知ることだけでも、知識としてワンステップ上がる。
- セッション1のデータについて、東日本大震災のデータで統一したほうが良いか、意見を伺いたい。
- 海外だと、南アジアなどでは女性の8割が亡くなるなど非常に顕著だが、日本ではそうではない。どの災害のデータもエビデンスがあってしっかりと違いを説明できるかと言えば難しい。死者のスライドは示さないという選択肢もあるかもしれない。アルコール依存症についても、インパクトはあるが、災害時特有の負荷というのは言いにくい。そういった意味で、男女が気付いていたニーズが違ふといったことは、インパクトはないが使いやすい。
- 東日本大震災の場合は、水防団や消防団の活動をしている男性が亡くなられたケースがある。阪神淡路大震災の場合は、どの年齢階層でも女性の方が多く亡くなっていることと、建物の下敷きが原因で多くの方が亡くなっていることから、体力的に弱いという女性の特性と死因との関連性が直感的に理解しやすいため、阪神淡路大震災のデータを使った方が良いのではないか。
- 性別や年齢等の属性と死者数の因果関係を学問的見地から明確に証明することは無理かもしれないが、阪神淡路大震災のケースは一般的にその因果関係があると理解してもらえるレベルなので使っても良いのではないか。セッション1の最初で、災害による死者数や健康被害における男女差を示すデータを使っているが、平常時のジェンダー格差がもたらす被害や復興への影響をわかりやすく示すためには、男女の復職できた人の割合の差や、復職にかかった時間の差等のデータを使うと、セッション後半のスライドの内容とも関連してよいのではないか。
- 事例の吹き出しの内容を増やしてはどうか。避難所で着替えられない女性など、いろんな世代の女性がいろいろなことに困っているということを伝えるのは重要だ

と思う。

○豪雨などのデータも対象としてはどうか。要配慮者の女性が配慮者を連れて避難しなくてはならない場面で避難できなかったといった事例も聞く。ケアをしなくてはならない立場からすると、自分だけでは避難できないといった事例を加えてはどうか。

○セッション2は長めに感じた。短めにする工夫か、途中でワークを入れるなど工夫するとよい。

○セッション2の危機管理監は、市区町村では置いていない場合が多いので、防災課長などに変える方がよい。また、スライド28の福祉部長は、経済に関する部署として商工労働などに変更するとよいのではないか。

○セッション2の「石巻復興支援ネットワークやっぺす」の女性への就業支援や起業支援の取組事例の紹介については、支援の具体的な内容が分かるように見直してはどうか。就業支援の具体的な内容は目にする機会が少ないので、とても参考なと思う。

○セッション2のスライド「2 地方防災会議、3 地域防災計画の作成・修正」は、地方防災会議の女性委員を増やすため、女性が多い専門職の保健師、助産師、看護師などからも委員に登用するように書かれている。これは、「災害対応力を強化する女性の視点」ガイドラインの内容を基にされているので、変更は難しいかもしれないが、文京区の試行研修の参加者アンケートの結果にもあるように、女性だからといってジェンダー視点があるとは限らず、よりジェンダー意識がある教員（大学教員等）等を登用する方がよいのではないか。

○女性委員の割合を上げる問題については、日本政府の方針で、あらゆる分野における女性の活躍を強力に進めていることから、防災でも当然進めないとしないことを理解していただく必要がある。どこの分野も適任者がいないという問題はあるが取り組んでいることを説明するスライドが1枚あるとよいのではないか。

○セッション3の「どうあるべきか」の表現は、「目指すべきゴール」とか「目指すべき目標」と言ったほうが分かりやすいのではないか。

○いかにアクションにつなげる効果を上げていく観点から、セッション3では、オンラインだから故の難しさはあるものの、参加者同士で話し合ったり、こういうことできるといいねと想像しあったりできる工夫があるとよい。

○平常時の男女平等のデータが、災害のときになったらどう表れるかといった問題提起をして、検討してもらうワークも考えられる。

○アンケート結果の「ある程度分かった」が5割程度の項目の結果を良くしていくといった観点から、要配慮者のことに触れてはどうか。災害時には平常時における社会の課題が顕在化するが、その一つが女性の困難・負担であり、もう一つとして要配慮者の困難も増大することがある。要配慮者について触れるとより広いターゲットに目が行くと思う。女性のニーズへの対応についても言い方を少し変えて、意思決定の場に男性が多いと、そもそも気付かれなかったりすることと、女性も男性も

ささいなこととして捉えてしまうことで見過ごしてしまうことにより被害が拡大してしまうから、女性の参画が必要であることといったロジックで説明してはどうか。

○要配慮者の問題を取り上げるとすると、説明しないといけないことがたくさんあり、時間を短くする方向で考えると、しっかりと取り上げるのは厳しいと思われる。例えば、最初あるいは最後で、災害時に配慮しなければいけない多様性について説明したうえで、本研修では男女共同参画や女性の配慮に焦点をあてることを説明してはどうか。

○同意見である。しかし、ジェンダーの課題は、本来ジェンダーだけでなく、ジェンダーと貧困、ジェンダーと年齢、ジェンダーと障害といったようにインターセクション（掛け合い）で考えなくてはならない。これは、女性は単一ではなく、女性の中にも多様性があるからで、女性の多様性を踏まえて取り組むことは不可欠である。ただ、多様性に重点を置きすぎると、肝心のジェンダーがぼやけてしまうことが懸念される。

○要介護者、要介助者、要配慮者の取り扱いは、ジェンダーと関連性が大きい。性別役割分担で、平常時こうした人々のケアを担っているのは女性の場合が多いからである。自宅で発災した場合、女性が1人で要介助者を避難所に連れていかななくてはならないといった問題も、逃げ遅れの原因に関連してくる。ケアの役割から、女性の復職や就職に影響をきたすことも多い。

○ジェンダーの問題や女性の問題は、多様性の話につながってくる。ジェンダーの問題は、男女共同参画や女性だけで考えればいいたろうとなりがちだが、例えば、福島県のビッグパレットの避難所での事例でいうと、東南アジアや中国出身で、日本人と結婚した外国人が多かった。女性はみんな同じではなく、そもそも言葉が通じないとか、外国人だからという理由で差別されるとか、そういった問題が出てくる。ジェンダーと多様性の問題は切り離せないが、地域によっても課題は違いたろう。多様性のすべてについて説明する時間がないのであれば、その地域に合わせた課題というところで触れてはどうか。

○セッション1の起こり得る影響という話の中で、起きている問題をささいなこととして捉えてしまうこと自体が、生命に関わる問題や、その人の人生に長く関わる影響があるという話をしてはどうか。今あるいくつかのスライドを少し変えれば、要配慮者の課題をボリューム増やさないで入れられるのではないか。

○アンケート結果にある「自分には関係ない」と考えている人に関係あるということを理解していただくには、要配慮者の問題は必然的に入ってくるのではないか。高齢者や障害者の女性の話などのデータを入れ込むのは重要ではないか。

○各セッションを通じて繰り返している3本柱で強調している「参画」、「連携」、「育成・理解促進」について、「参画」という言葉は、自治体の場で言われると一歩引く感じがある。行政の文章では、主体的な担い手であり、当事者であることが最初に来て、次の段階が参画といった使い分けをしたりしている。「参画」のところに、ガイドラインの基本理念で使っている「主体的な担い手」を加えて、女性が主体的に担って動いていくのだということを分かるようにしてはどうか。

○進め方として飽きない工夫をしたり、写真が少なめなので多くしたり、できるだけリアリティの感じる写真を使ったりするよう工夫するとよい。

- セッション1を動画で視聴して、セッション3のワーク1も事前課題で取り組んでから参加してもらうとすると、セッション2と3を合わせて1時間程度で実施するといった使い方も出来る。このような応用的な使い方も紹介すると良い。
- 今後実施する試行において、次のステップにつながるような内容だったかということ聞いてはどうか。分かりやすかったかも大事だが、具体的なアクションや、誰と組もうとかが見つけられたかなど、具体的なステップにどこまで進められるような内容だったかが確認できるとよい。
- アンケートでは、最後の設問として、「この研修を受けて自分だったら何をやりますか」など、自分の身近なところでの仕事をどう変えたらいいと思うか、という問いを加えるとアクションにつながるのではないか。
- アンケートでは、回答者の性別も聞いた方が良いと思う。セッション1で、防災・復興施策に男女共同参画の視点を入れるための取り組みの1つとして、男性の理解促進を図る、とされているが、男性だけでなく女性の理解の促進も必要かもしれない。その観点で、回答者の性別を明確にして、男性と女性の間で理解に差があるのか、男性の意見と女性の意見の間ではどういう差があるのか等を見てみるとよい。
- 研修の内容は充実しているので、これらを短時間で理解できるかどうか鍵になってくると思う。自治体の職員が、自分の所属する組織の職員向けに講義するというのが前提になると思うが、自治体によって差が出てきてしまうのではないか。
- 展開の仕方として、内閣府男女共同参画局から自治体に対して、本防災研修プログラムの説明をしっかりとやっていきたい。自治体職員の方自身で、できるようになっていただくことを目指していくが、来年度は、まず中身を知ってもらい、活用してもらうところへの働き掛けをしっかりと行っていきたい。アドバイザーを派遣する事業を内閣府で実施しているが、この研修の講師として派遣するなど、展開の仕方をしっかりと考えていきたい。展開方法については、第4回で議論したい。
- ジェンダーの問題を考えていけば、性的マイノリティーの問題は当然考えていく話であり、避難所でも配慮が必要であるといったことを入れていけないか。

議事（3）事例集（素案）について

- たいへん分かりやすく、文章での説明も充実していて、とても参考になると思う。スライドが複数枚にわたるので、何枚中の何枚目かが分かるようにするとよい。
- 写真がたくさんあり、分かりやすいものになっている。少し注意したほうが良い点として、性暴力の防止活動自体は革新的だったが、ポスターの内容や表現については改善の余地があるのではといった意見も聞かれるため、ポスターの掲載はやめてはどうか。

以上